

65 癌患者における組織中CEA値(第二報)

国立横須賀病院 研究所

佐藤政弘

東京電子 臨床放

野本剛史

腫瘍及び各種癌疾患においてCEA値の測定は非常に有意義とされているが、血中及び尿中と我々が第18回に報告した胸腹水等に至るまでの測定で癌患者にて血中体液等、必ずしもCEAが高値とは限らない。そこで各種組織を引用して化学的にも追求可能であろうと、正常者及び癌患者のCEA値を検討した。

病理所見に使用する各臓器biopsy(主に肺、肝、胃、腎、脾子宮、結直腸)の一部100~300mgを対象として、生食にてhomogenate後CEA RIAkit(2step sandwich method: Dainabott & co)を使用して行なった。

各種正常臓器濃度、肺 $25.3 \pm 5.2 \text{ ng/ml}$ 、肝 $3.7 \pm 1.6 \text{ ng/ml}$ 、胃 $38.0 \pm 6.7 \text{ ng/ml}$ 、腎 $8.6 \pm 5.6 \text{ ng/ml}$ 、脾 $13.5 \pm 4.5 \text{ ng/ml}$ 、子宮 $17.4 \pm 3.5 \text{ ng/ml}$ 、結直腸 $56.1 \pm 21.2 \text{ ng/ml}$ SDが得られ、癌腫瘍組織では平均 57.8 ng/ml 、 36.1 ng/ml 、 65.7 ng/ml 、 18.2 ng/ml 、 24.8 ng/ml 、 23.0 ng/ml 、 78.5 ng/ml であった。

以上により各臓器によるCEA値の測定は可能であり、組織別濃度は、胃に加えて肺、結直腸の高値率、肝、子宮等の低値とした前回の報告を裏付ける値が得られた。実質組織に比較し空内臓器(胃、腸等)では、採取部位等少々の問題はあるが、疾患による濃度変化異常の掌握としては充分であり今後病理所見を含めて採取及び量共に可能な場合には、化学的分析によるCEA値の測定は意義あるものと考えられる。

66 Radioimmunoassayによる癌胎児性抗原(CEA)測定の臨床診断学的意義についての検討

第4報、消化器疾患々々消化液中のCEA様物質の測定について。

福島医大 二内

村井隆夫、飯塚美伸、正木盛夫、粕川礼司

同、R1研

斎藤 勝

はじめに：血中CEA測定による悪性腫瘍の血清学的診断の臨床的意義についてはすでに報告した通り今日では評価は定まりつつある。

一方、血液以外の体液中にもCEA又はCEA様物質が存在しており、消化液中にもCEA様物質が存在していることが知られている。今回はこの消化液中CEA活性を各種消化器疾患々々で測定し、その臨床応用の可能性について検討を加えたので報告する。

対象並に方法：対象は診断の確定した各種消化器疾患々々者62名で、消化液の採取法は唾液はチューインガム法、胃液、十二指腸液、胆汁、脾液はPSテスト法分画採取法に準じて行った。検体は採取後直ちに $1.5 \times 10^4 \text{ rpm}$ 15分遠心し雑挾物、粘液を除去、1.2M過塩素酸で抽出後、透析し測定まで -20°C で凍結保存した。

CEAの測定はZ-gel法RIAで行った。

成績並に考察：消化液中CEA活性は唾液 $79 \pm 114 \text{ (ng/ml)}$ 、胃液 78 ± 130 、十二指腸液 143 ± 197 、胆汁 97 ± 110 、脾液 11 ± 17 で、十二指腸液、胆汁、胃液・唾液、脾液の順に高かった。しかし個々の症例での変動が大きく臨床応用は問題であるが、唾液高値例では他消化液も一般に高値を示し、個体の分泌能の差の存在を示唆した。

各種疾患との対比では唾液ではSjögren症候群2例で有意の高値を示した。胃液では胃炎、胃潰瘍、胃癌で各々 95 ± 172 、 53 ± 31 、 $84 \pm 90 \text{ ng/ml}$ で潰瘍群がやや低値であるが有意差はない。但し胃液遊離酸度とは逆相関を示した。胆汁では例数は少ないが胆管結石4例、胆道癌1例で各々 284 ± 323 、 273 ng/ml と高値を示した。脾液では胆道癌1例、胆管結石4例、脾癌2例で 34 、 41 ± 27 、 $37 \pm 33 \text{ ng/ml}$ と高値を示し脾癌では慢性脾炎より高値を示すことが注目された。

消化液中CEA活性の測定は脾液を除いては変動が大きく臨床応用にはまだ問題が多い、脾液中では対照例が低く、変動巾も少なく、少数例であるが、脾癌で高値を示し、臨床応用が最も期待されると考えられた。